

平成26年度「重点研究費」研究成果報告書

研究課題	教員養成カリキュラムと教師の優秀性の研究
------	----------------------

研究代表者

氏名 浅沼 茂	所属 教育学	職名 教授
------------	-----------	----------

研究分担者

氏名 橋本 美保	所属 教育学	職名 教授
古屋 恵太	教育学	准教授
遠座 知恵	教育学	准教授
末松 裕基	教育学	講師
戸田 孝子	教育学	講師

【研究成果の概要】（文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度）

教師の優秀性は、教師自身の持つ創造性にある。明治初期の翻訳教育学の時代から欧米の教育方法を手本にした教員養成がなされて以来、その方法は、一斉教授の下にその方法的な定型を全国に標準化するという制度的な普及を図ってきた。教員養成が方法的関心に重点置かれていたのに対して、カリキュラム内容については固定化した知識をそのまま継承するだけの創造性を欠いたもので成り立っていた。戦後の教員養成改革の学芸大構想は、このような師範学校の閉鎖性を打ち破ることはできなかった。相変わらず、教科教育の実態を見るにつけ、カリキュラム内容についての工夫もなく、教科書を中心とした公定の知識を注入するやり方が多い。子ども自身に考える力、創造性を求めるならば、教員養成のカリキュラム自身がそのような内容となっているべきである。PISAのテストのように論理的・創造的なコンペテンシーが強調されているのが現在の日本のカリキュラム・ニーズである。しかし、現在のカリキュラムの動きは、アカウントビリティと評価規準による上からの管理に集結されようとしている。それは、主体的で創造的な生き方を許さない。リベラル・アーツ・カレッジ（学芸大）の理念から後退していると言わざるを得ない。それは、単純に一般教養的な科目を増やせば良いというのではなく、カリキュラムの内容自体にそのような要素が不可欠であるということなのである。現在の教員養成の専門職性を将来の構想としているカリキュラムは、欧米の動きに範をとろうとしている。海外における教職大学院の修士課程としての資格要件のカリキュラム内容は何か、根拠はどこにあるのか、それは、教職大学院が単に箔をつけるというためのものではなく、実践に基づいたカリキュラムによって教師の資質や創造性を培っているものと考えられているからである。このようなカリキュラムは、単純に教員養成の制度を6年制へと延長すれば自動的に改善されるというものではない。カリキュラムとは、教授法の形を決める重要な柱であり、その内容に基づいて人間類型も能力の形も決められる。教師にとっては、それは、より多くの自由研究の時間と相互の研鑽によって形成されるものである。とくに、民間主導の教師の自発的研究は、教師の創造性と考える力の育成に多くの力を与えてきた。この教師の力量形成のあり方は、教師の語りから明確になった。

研究成果発表方法

[発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入する。]

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。

研究成果については、平成26年9月に開催された日米教員養成協議会年次大会においてゲストスピーカーとして口頭発表をした。